



新装 01 号
2015・11

後藤美和子 / 長尾高弘 / 浅野言朗 / 倉田良成 / 小林垣堦



榎 第二号 / 二〇一五年十二月

編集人 / 倉田良成

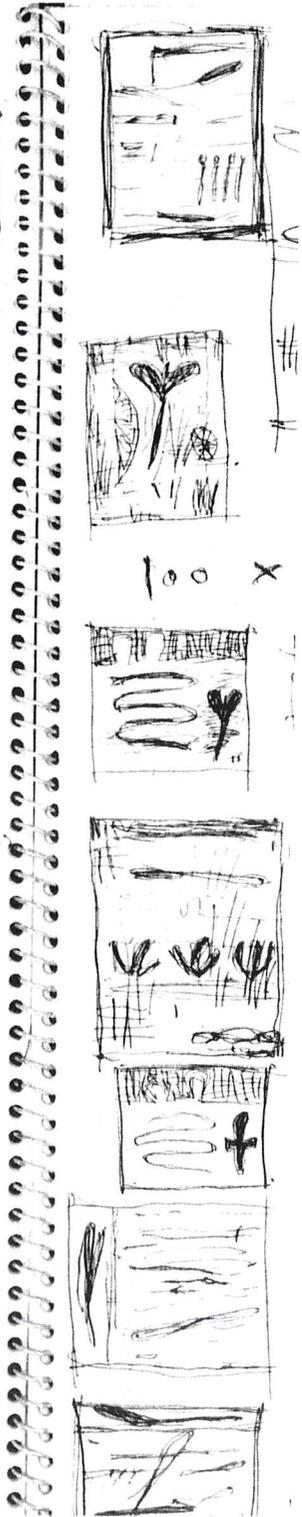
発行人 / 坂人進 (ワーズアウト)

〒158-0082 東京都世田谷区等々力2-20-17

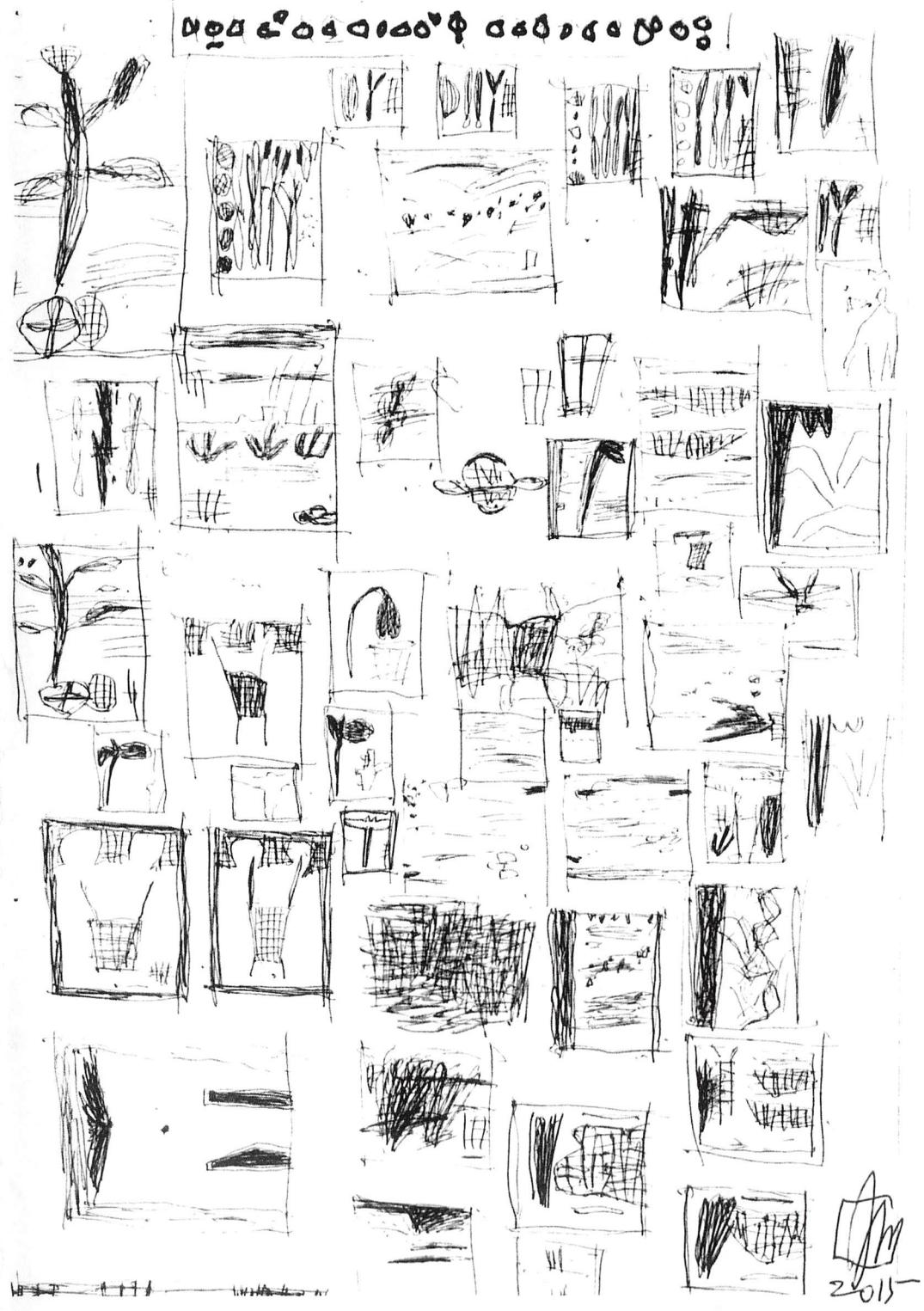
〒230-0078 横浜市鶴見区岸谷4-25-25 鶴見岸谷ハイツ二〇二



Langsam
feierlich



100 x



目次

後藤美和子	4
流線	
円形広場	
長尾高弘	6
Constitution 2015年9月のために	
浅野言朗	9
傾いた線の端部を膨らみへと近づけていく	
倉田良成	16
秋篠寺にて	
小林増嶋	18
風景	
画 和田彰	22

後藤美和子

流線

この辺りの人々はみな越して行ってしまった
擦り切れるようにして鳴く蝉がいた

なけなしの肉を喰う

月夜

流れる青白い雲の帯

もう真空しかない

息をとめ

それでも生きていくことのできるようになった

幼い

新しい虫

知らぬ間に這い出て行ったあれは……

理屈は巧いが
理由はぜんぜんだ と
テーブルの向こうで笑っていたね
よく効くやつをあげようか

躓いて転ぶ
そこが線路だ
少女はねむっている

爆死した兄の
(列車が来る)
大きな手
視ている眼
ハイミナール

*冒頭部分は「大挽歌」(詞・能吉利人 曲・桜井順 歌・野坂昭如)より一部を引用した。

円形広場

乗合馬車に乗って
ひとつの輪に向かう
刈り込まれた草原で
見知らぬ同士が降り立つ
鐘が鳴る
靴を脱ぐ
光を浴びたマンホールの上で
海流に遊びながら
足を寄せあい
髪を乾かし
うずくまる
砦が鳴く

長尾高弘

Constitution 2015年9月のために

イギリスは憲法の祖国って言われていますけど、
文章になった憲法はないんですね。

文章になった憲法はなくても

憲法はあつて立憲主義。

憲法と翻訳された英語の Constitution には、

構造、構成、気質といった意味もあつて、

言葉遊びなんか吹き飛ばす

ぶつともいものがあるんですよ。

日本には日本国憲法という

文章になった憲法がありますけど、

あえてそういうぶつともいものを探すとすれば、

もう戦争はこりごりだ、

国のためでなく、

自分のために生きたい、

つてことじゃないでしょうか。

今の日本はあの戦争に負けた結果ですからね。

湿った頁の隙間にさし挟まれたポर्टレートが

何故か怒って見える

少女はねむっている

安心している

迷い込むために迷路はあるのだ

理由はあとからやってくる

十とは去ふもののお前ではなし+

かつてそこに在ったという気配だけを残して

誰にも悟られずに去って往ったひとの

人ひとの 眼差しの

低輝度

少女はねむっている

懷中に蛇

列車の通ったあとに

座つて ひと思いに喰いちぎる為めの

だが「回送」ばかり走り去るので

機会はずつと先送り

口じゅうに砂

風景

おまえの残した ハイミナール
おまえの残した 手紙
おまえの言葉の やさしさが
ぼくを 苦しめる

大書された宣伝広告
雨の降る気配が

一瞬

遠く過ぎた日の暗い路地の幻を浮かび上がらせる
少女はねむっている
空砲が鳴った

いくつもの影がすべてゆく夕景

外国に行つて戦争をすることなど、
決して認められない。

でも、戦争したいやつらがいるんだなあ。

彼らにも Constitution みたいなのはあんだけど、

それは「憲法」じゃなくて「國體」なんですよ。

「國體」の世界では、

天皇を中心とする同心円のなかで、

外側にいる人間が、

内側にいる人間に、

絶対服従しなければなりません。

日の丸は、彼らの世界観のシンボルなんですわねえ。

彼らが女性、障害者、在日朝鮮、韓国人、

その他自分よりも「下」だと思つている相手全般に対して差別的なもの、

天皇や「上の人」に対して卑屈なもの、

みんなそのためです。

で、内側に行くために、

利用し合ったり、

蹴落とし合つたりしたりしてるんですわねえ。

天皇に忠誠を誓つているように見えても、

天皇自身が同心円的世界観に背くようなことを言つと、

平気で天皇に背くのもこの手の連中の特徴です。

このスタイルで突っ走って滅んだのは、偶然じゃないんですけどね。

「憲法」と「國體」、

どっちが勝つか、

ここは正念場でね、

負けるわけにはいかないのですよ。

のかなしみやむなしさにおそわれるようだ。しかしこれは
はけつして否定的な感情なのではない。遠くまで晴れて
いる秋の午後、境内の内でも外でも、まるできらめく水
のように鳥の声がいちじるしい。ここは他界などではな
く、いま訪れている世界の秋なのだ。やがて楼門からは
は介助者の手を借りて、車椅子ごと苔の寺から出てくる。
まるで輿にのるように、胎内からいきなり産み出された
幼子のように。

秋篠寺にて

境内に入るとまず一面の苔の衣である。それまでに何回か、破壊や火災の歴史に巡り合ってきた、という経緯のためか、境内にはそれらのうえにさまざまな痕跡とされているんな小さな石造物群がある。そうしてそれらは年月を経てすべて濃緑の苔に覆われているのである。境内を導かれるままに、やがて本堂にたどりつく。白塗りの堂に入ったばかりの僅かの間、眼はくらやみに襲われた思いがあるが、やがて光を取り戻して少しずつ、中の様子が分明になりはじめる。濃密に焚かれた香のけむりのあいだから、まず薬師の尊像、日光月光、毘沙門天、十二神将、地藏菩薩、それらのなかでひとときわ背高く、伎芸天がわずかにふくらかな腰をひねらせて立っている。何よりも優美な伎芸天は、ほんらいは怒りの神でも呪いの神でもないのだが、かのかんばせを見ると、無限

浅野言朗

傾いた線の端部を膨らみへと近づけていく

a

光は傾いている

机の上は、笑わない

b

机の上に、傾ける

溜め息を積み上げるように 預ける

c

窓、開かれない

鋭角に開くことを思い描く

d

敷き詰められて行く、交点

交わらない、交点の連鎖

e
風が吹いているのを、誰が気付くだろうか？
テーブルの上に、円筒を転がす

f
円筒は、夜がふけると、
少し、球体に近付いた

g
ポケットの中を探っている
世界の底部に触れる

h
占められた隅部
数え 忘れて みる

i
鳴り止まない電話 の跡地で
白いメモが破られる

y
小鳥の眠っている、あちらへ
ランプカードを積み上げるために

z
窓枠に、吊り下げた
揺れている球体の膨らみ を見ない

j
破水、どこへ？
球体、跳ね回っている、事後

k
控え室の、腐乱して行く時間
とりとめもない、会話の束、終息

l
影の束が用意されるが
机の上では、解かれない

m
練習と、その予後
ボール、三回跳ねている

n
音ではなく、無音でもなく
異質な人影を見られることもない

o 電球 光らない、球体
腕を回したままの人影への 接線

p 空がようやく慰謝の色を浮かべた
その色をパレットに移してみる

q 知らない人からの電話が鳴ると
電話帳の任意の番号を一つ抹消する

r 相変わらずの、コップ
それから、というよりも、その後

s 知らないようにして
知らないふりをして

t 空欄の増殖、するりと
羽ばたきの時間を待ちながら

u ベンチの上に 影を横たえる
触診 右、左、側面…

v 唐突の、網掛け
消えるように／消さないように

w 滑走路、敷き詰める
逃げて行く飛行隊 静止する

x 空を傾けないように、砂場に行った
既に用意されていた何人か 埋設